

平成21年 5月14日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520306
 研究課題名（和文） 談話理解モデルを利用した日英語名詞句の分布と選択にかかわる語用論的研究
 研究課題名（英文） A Pragmatic Study of the Choice and Distribution of Japanese and English NPs based on the Discourse Understanding Model

研究代表者 吉田 悦子 (Yoshida Etsuko)
 三重大学・人文学部・准教授
 研究者番号：00240276

研究成果の概要：

本研究では、日本語と英語の地図課題対話コーパスに基づき、対話的談話における名詞句の分布と選択についてセンタリング理論を用いて分析し、談話構造の階層性との関連性を明らかにした。とりわけ、話題となる要素の導入、定着、そして次の話題となる要素への移行という過程を経て形成されていく名詞句の連鎖パターンは、局所的かつ大局的な談話の整合性と深く結びついていることを指摘し、その語用論的要因について詳細に論じた点は学術的意義がある。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：語用論・計算言語学・対話・指示表現

1. 研究開始当初の背景

日本語の照応研究の中心は主語の省略やゼロ代名詞の生起についてのものが圧倒的に多く、名詞句と談話構造とのかかわりに注目した研究はまだ少数である。同様に英語の照応に関する理論的研究は代名詞化にかかわる問題が中心であり。名詞句との交替や連鎖に注目したものは少なく、十分な議論が尽くされ

ているとはいえない。対話的談話における名詞句の連鎖パターンをめぐる指示・照応研究としての本研究の学術的特色は、書きことばに基づいた従来の照応形の解釈では捉えきれない現象を、計算言語学の談話モデルを利用したアプローチを利用することで、指示表現と談話の大局的な整合性の様相を明らかにす

るという視点であり、談話における照応研究と計算言語学の分野との橋渡しの研究として、注目に値する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「より自発的で自然な」話しことばのデータである日本語と英語の地図課題対話パラレルコーパスに基づき、談話における名詞句の選択と分布について談話構造の階層性と結びつけ、人が指示表現を理解する認知的基盤を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究では、指示表現の現れやすい環境を設定して対話データを収集し、計 16 対話分の日本語と英語の地図課題対話コーパスを構築した。このコーパスにおける名詞句の分布と選択についてセンタリング理論を用いて分析し、局所的・大局的整合性との関連性を考察した。

初年度は日本語対話データの分析を中心とした。日本語名詞句の生起パターンには継続性が認められ、このパターンが談話構造の階層性とどのように関連しているのかについてデータをもとに検討した。

2 年目は、日本語対話データ 8 対話分にくわえて英語の対話データ 8 対話分に関して英語名詞句と日本語名詞句との対応関係を意味機能から徹底的に分析した。そして談話における日英語の名詞句の振る舞いには共通した現象があり、談話の整合性に貢献していることを明らかにした。仮説として設定した「談話における名詞句の選択と分布が談話単位内部の局所的な結束性とどまらず、談話単位をこえた談話の大局的な整合性とも深くかかわっている」ということをセンタリング理論を拡張したキャッシュモデルを援用することによって説明することを試みた。

最終年度は「日本語話し言葉コーパス」より 4 対話分と BNC および ICE-GB における対話データのうちそれぞれ 2 対話分、計 8 対話を抽出し、地図課題対話コーパスの生起パターンと比較し、話しことばにおける一般化された現象としてとらえられるかどうかの可能性を探った。

4. 研究成果

本研究は、日本語と英語の地図課題対話コーパスに基づき、対話的談話における名詞句の分布と選択についてセンタリング理論を用いて分析し、談話構造の階層性との関連性を明らかにした。とりわけ、名詞句の連鎖パターンが局所的かつ大局的な談話の整合性と深く結びついていることについて談話理解モデルを援用して、人が指示表現を理解する語用論的要因について論じた点は学術的意義がある。

初年度の成果では、対話的談話では、名詞句の連鎖は話題となる要素の導入、定着、そして次の話題となる要素への移行という過程を経て形成されていくが、そのパターンは対話者同士の知識や相互作用の方法に大きく左右されることが指摘された。

2 年目は、センタリング理論が（ゼロ）代名詞の使用や代名詞化についての規則や予測の解明だけではなく、人間の認知モデルとしてより妥当で柔軟性に富む談話レベルでの拡張を受け入れる計算モデルであることを実証することにも踏み込んだ議論をおこなった。

最終年度は「日本語話し言葉コーパス」より 4 対話分と BNC および ICE-GB における対話データのうちそれぞれ 2 対話分、計 8 対話を抽出し、地図課題対話コーパスの生起パターンと比較し、話しことばにおける一般化された現象としてとらえられるかどうかの可能性を探った。自然発話は課題対話とは達

成目標が異なるため、分析に工夫が必要であるが、具体的な成果としては、話題の中心になっても代名詞化されない名詞句の連鎖現象が同様に観察されたことである。このことにより、談話指示と談話の整合性に関する仮説を補強すると共に、一般化して議論する可能性が開かれたことは重要である。

センタリングモデルおよびキャッシュモデルの妥当性についての評価はまだこれからであるが、本研究が語用論的視点からの指示表現の現象解釈と計算言語学的アプローチとを融合させる手法により、日英語の対話研究をおこなったことは、対照言語学的価値が高く、国内外でも貴重な成果として位置づけられる。

また、最終年度の成果として対話におけるグラウンディング成立にかかわる現象に注目した共同研究を立ち上げたことは対話の周辺的研究に移行する意味を問うものでインパクトが強い。この成果は共同論文にまとめており（吉田・Lickley 2009）、談話指示の使用パターンと言い淀みが共起する対話プロセスはグラウンディング過程に寄与しているという仮説を検証することを基盤としている。今後は対照言語学的視点をふまえた定量的分析が課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

- (1) 吉田悦子・Robin Lickley (2009.3) 「対話におけるグラウンディング過程とは何か：談話指示と言い淀みの分析」『言語処理学会第 15 回年次大会発表論文集』426-429 査読無
- (2) 大槻きょう子・吉田悦子(2009.3) 「対話における省略発話の相互作用性」『言語処理学会第 15 回年次大会発表論文集』

498-501 査読無

- (3) 竹井光子・吉田悦子・藤原美保 (2009.3) 「談話レベルのメタ言語能力育成のためのコンパラブルコーパスの構築と活用」『言語処理学会第15回年次大会発表論文集』626-629 査読なし
- (4) 吉田悦子・谷村緑(2008.3) 「同一指示関係を記述するためのアノテーションモデルの検討--MUC7 と MATE を比較して」『言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集』(440-443) 査読無
- (5) 駒田ゆき子・吉田悦子(2008.3) 「日本人英語学習者にみられる照応表現の特徴と問題点--センタリングモデルによる分析の可能性」『言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集』(444-447) 査読無
- (6) 竹井光子・吉田悦子(2008.3) 「コーパス分析による照応表現の収集とその教育的活用」『言語処理学会第 14 回年次大会ワークショップ「教育・学習を支援する言語処理」論文集』(23-26) 査読無
- (7) Etsuko Yoshida(2007.12) ‘Sentences as interaction: the function of conditional clauses and its implication in dialogic discourse,’ PALA (the Poetics and Linguistics Association) 2007 Proceedings Online, <http://www.pala.ac.uk/resources/index.html> 査読無
- (8) 吉田悦子(2007.3): 「対話における逸脱文のパターンと発話解釈について」『言語処理学会第 13 回年次大会発表論文集』(262-265) 査読無
- (9) 駒田ゆき子・吉田悦子(2007.3): 「日本人英語学習者コーパスを利用した照応表現と談話の一貫性の考察」『言語処理学会第 13 回年次大会発表論文集』(1038-1041) 査読無
- (10) 吉田悦子(2006.11) 「対話における日本語名詞句の連鎖パターンについての認知的考

察」『日本語用論学会第 8 回大会発表論文集
創刊号(2005)』 205-208. 査読無

(11) Etsuko Yoshida (2006.9) 'Referring
expressions and local coherence of discourse in
the parallel corpus of English and Japanese map
task dialogues' In *Proceedings of the 10th
Workshop on the Semantics and Pragmatics of
Dialogue (SemDial-10)* (brandial'06, Potsdam,
Germany) 195-196. 要旨査読有

[学会発表] (計 9 件)

(1) 吉田悦子 (2009/03/05) 「対話におけるグラ
ウンディング過程とは何か：談話指示と言
淀みの分析」言語処理学会第 15 回年次大会
鳥取大学

(2) 吉田悦子 (2008/10/25) 「省略と反復をつ
なぐもの：「自由拡充」による解釈プロセス
」日本英文学会第61回九州支部大会英語学シ
ンポジウム『関連性理論の諸相』 福岡大学

(3) 竹井光子・吉田悦子 (2008/03/20) 「コーパ
ス分析による照応表現の収集とその教育的
活用」言語処理学会第14回年次大会ワークシ
ョップ「教育・学習を支援する言語処理」,
東京大学駒場キャンパス

(4) 駒田ゆき子・吉田悦子 (2008/03/19) 「日本
人英語学習者にみられる照応表現の特徴と
問題点—センタリングモデルによる分析の
可能性」言語処理学会第 14 回年次大会,東京
大学駒場キャンパス.

(5) 吉田悦子・谷村緑(2008/03/19) 「同一指示
関係を記述するためのアノテーションモデ
ルの検討—MUC7 と MATE を比較して」言
語処理学会第 14 回年次大会, 東京大学駒場

キャンパス

(6) Yoshida, Etsuko (2007/07/12) 'Patterns of
use of referring expressions in English and
Japanese dialogues', The 10th IPrA
(International Pragmatics Association),
Göteborg, Sweden.

(7) 駒田ゆき子・吉田悦子 (2007/03/20) 「日本
人英語学習者コーパスを利用した照応表現
と談話の一貫性の考察」言語処理学会第 13
回年次大会, 龍谷大学 瀬田学舎

(8) 吉田悦子 (2007/03/20) 「対話における逸
脱文のパターンと発話解釈について」言語処
理学会第 13 回年次大会, 龍谷大学 瀬田学舎.

(9) Yoshida, Etsuko (2006/09/13) 'Referring
expressions and local coherence of discourse in
the parallel corpus of English and Japanese map
task dialogues', The 10th Workshop on the
Semantics and Pragmatics of Dialogue
(SemDial-10) brandial'06, Potsdam, Germany.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 悦子 (Yoshida Etsuko)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：00240276

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者